

# 14<sup>th</sup> Meeting of The Asian-Pacific Society for Neurochemistry に参加して

國澤 和生

(生理学研究所 分子神経生理研究部門)

私は、幸いにも JSN からのトラベルアワードを受賞し、2016 年 8 月 27 日～30 日の間、マレーシア・クアラルンプールで開催された 14th APSN Meeting に参加してきましたので、ここに学会レポートとして報告させていただきます。

さて恥ずかしい話ですが、私は研究はもとより観光でも今回アジアに行くことが初めてでした。隣国のシンガポールは観光で有名ですが、マレーシアといえば??…と考えても思い当たるものがなく、治安も含めて行く前は期待の一方で不安もありました。しかし、実際にマレーシアに行ってみると、自分が今まで見たことがない世界が広がっていました。近代的な高層ビル群と古い街並みの間をマレー系・インド系・中華系といった様々な人々が行き交う中、観光客として欧米人も多くいたことから、最初には世界中の人種がいるんじゃないか!?と驚くくらい「人種のるつぼ」という言葉がぴったりの国でした。また、様々な文化・宗教が混在しているにも拘らず、南国ゆえか、非常にのんびりとした雰囲気を感じたのを覚えています。APSN Meeting の会場はクアラルンプールの繁華街・ブキビンタンから程近いホテルイスタナという場所で開催されました。私は昨年度開催された 25th ISN Meeting にも参加していましたが、その時に比べると、オーラル・ポスター会場が全て 1 フロアで行われており、非常にコンパクトな会場となっていました。そのような工夫もあり、発表ポスターを 1 つずつゆっくり見ることができ、自分の興味のあるセッションも重複することなく聞くことができた点は APSN ならではの良い所だと思いました。本学会では非常に多くのシンポジウムが企画されていましたが、特に私は“白質と精神疾患の関連”について興味を持っていたこともあり、「Common Molecular Aspects of Neurodevelopmental and Psychiatric Disorders」というセッションは印象深いものでした。今後私自身が行いたい実験系の参考になるだけでなく、新たな視点から精神疾患の分子メカニズム解明にチャレンジしている研究者の姿を見てとても刺激を受けました。また、シンポジウムでは多くの日本の先生方の発表も拝聴することができ、元々英語に自信のない自分でも「英語ではこのような受け答えをしたら相手に理解を得られるんだ」と質疑応答の面でも勉強になるシンポジウムとなりました。

本題の私自身の発表についてですが、私は「Analysis of neuronal responses against disruption of paranodal junction」というタイトルでポスター発表を行い、脱髄性疾患の初期に生じる髄鞘-軸索間相互作用の破綻が神経細胞側に与える影響について研究したものを報告いたしました。ポスター発表は大会中の 3 日間に分かれて連日行われましたが、幸いな事に全ての時間を通して多くの方が興味を持って来聴してくださり、とても有意義な時間を過ごす事が出来ました。昨年度の ISN Meeting での発表経験の甲斐もあり、ただ質問に答えるだけでなく、なぜそこに疑問を持ったのかをディスカッションし合え



オーラル会場（左）とポスター会場（右）の様子

たことでお互いの理解をもうワンステップ深めることが出来たのではないかと考えています。また事前にポスターを見る時間が多く設けられていたこともあり、私自身の研究に関連する脱髄関連の発表だけでなく興味のある発表も含めて様々な発表について積極的に質問・ディスカッションすることが出来ました。ポスター発表後にはパーティー式のランチタイムが設けられていたこともあり、発表で話足りなかったことは一緒に食事をしながらもう少しフランクに交流を深めました。特に、マレーシアのマラヤ大学から来られた若手研究者の方とは研究分野は全く違っていたものの非常に懇意になり、日本・マレーシア双方の研究事情や将来の研究展望などを真剣に語り合うなど、本当に良い経験になったと思います。APSN は若手研究者の参加者が多いため、少しの勇気があれば海外の研究者とも交流出来るチャンスが多くあったように思います。私も本学会を通してマレーシア・中国・韓国など多くの国々から来た若手研究者達と意気投合し、今でも連絡を取り合う関係になりました。もちろんまだまだ未熟者ではありますが、海外学会だからこそ得る経験は本当に多いなと切に感じています。何かきっかけがなければ海外の研究者と交流することは出来ません。もしまだ機会や勇気がなくて今一步踏み出せない、そんな若手研究者がいたら、ぜひ思い切って一緒に経験を積んでいきましょう。

最後になりましたが、このような大変貴重な機会をくださった日本神経化学会員の皆様に深く御礼申し上げます。